日本近代化の父　小栗上野介

文・写真：河辺雄二、CFAY広報課

四季折々、二千株のバラに彩られて訪れる人々の目を楽しませてくれるフランス庭園様式のヴェルニー公園。その公園の中央にはフランス人技術者フランソワ・ヴェルニーとともに、幕府勘定奉行・小栗上野介忠順（ただまさ）の胸像が横須賀製鉄所のドライドックを見守っている。小栗は造船、船舶修理、工作機械製造を柱とした近代工業施設「横須賀製鉄所」の建設に主導的な働きをして、日本近代化の礎を築いた人物として記憶されている。幕末に工事の始まった製鉄所はのちの横須賀海軍工廠となって日本帝国海軍の拠点となり、延いては貧しい一漁村に過ぎなかった横須賀が大きく発展することに繋がっていった。

昨年六月から今年四月まで13回にわたり連載した拙稿「咸臨丸太平洋横断航海150周年を迎えて」の中で小栗は主役の一人として登場し、遣米使節としての渡米や横須賀製鉄所建設に奔走する姿を描いたが、横須賀基地に働く従業員をはじめ、内外から予想以上の反響があり、なかでも若い人たちから小栗上野介についてもっと知りたいという声が寄せられた。そこで今回は番外編として、前稿では掲載できなかった上野介の生い立ちからのエピソードと小栗家の出自を紹介していきたい。

神田駿河台生まれの江戸っ子・小栗忠順

小栗忠順は文政十年（1827）六月二十三日、神田駿河台に家禄二千五百石の旗本・小栗又一忠高の長男として生まれた。駿河台の地名は、豊臣秀吉の命で駿河の国・駿府から江戸へと国替えになった徳川家康の家臣たちが屋敷を構えたところから名付けられている。駿河台は神田川南斜面、現在の靖国通りから御茶ノ水駅にかけての山を削って造成した。のちに関が原の戦いで勝利した家康が天下人となり、征夷大将軍を任命されて江戸に幕府を開いたことによって、全国の大名の屋敷が建てられて人や物が集まり、江戸は人口と流通および消費における世界有数の大都市に発展した。小栗家の屋敷跡は明治大学の近くＹＷＣＡの一角にあり、屋敷から坂を下って濠沿いに進んで大手門を渡ればそこは江戸城三の丸で、忠順愛用のアラビア馬を飛ばせば10分の距離である。

餓鬼大将の幼年時代

忠順は幼名剛太郎と名乗り、九歳（数え年・以下同）で安積艮斎（あさかごんさい）の塾に入門した。当時艮斎は江戸で高名な漢学者で、門人四百名を数えるほどであった。艮斎の生涯にわたる門弟は二千名を越え、川路聖謨（としあきら）、吉田松陰、清川八郎、高杉晋作、福地源一郎、岩崎弥太郎、木村喜毅らをはじめ、幕末から明治に活躍した人物が数多く輩出している。忠順と同期には五歳年上の栗本鋤雲がおり、のちに二人は生涯の盟友となって横須賀製鉄所建設に尽力する。艮斎の教育方針はとにかく誉めることで、弟子の長所を見つけては誉めたという。なにも誉めるところが見つけられない弟子には、その弟子の書いた書の紙まで誉めたといわれ、艮斎のやさしさとその人柄が伝わってくる話である。

栗本によると、忠順は艮斎の講義には沈黙して一見痴童のようであったが、その実執拗剛腹、言うなれば意地っ張りの頑固者だった。悪戯では童のなかで群を抜いて頭角を現し、餓鬼大将として覇権を握って人を使いまわす力量があったと回想している。

文武両道の青年期

十四歳の頃、のちに妻となる道子の父、播州林田藩主・建部内匠頭政醇（まさあつ）の屋敷を訪ねたときのエピソードは語り草になっている。忠順の挙動は大人の如く、十四歳にして煙管をくゆらし、煙草盆を強く叩きながら一問一答建部内匠頭に堂々と応対した。林田藩の家臣たちはその少年らしからぬ態度に驚きながら、将来どのような人物になるだろうかと噂しあったという。

小栗は文武に優れ、剣は直心影流の免許皆伝。また柔術、馬術、弓術にも精進し、嘉永元年二十二歳のときには将軍上覧の弓術大会において、大的皆中で褒美として時服を賜っている。砲術は田付流を学び、ここで学識豊かで開国論を唱える年配の与力・結城啓之助と知り合い議論を交わしたことが、小栗の開明的な考えに影響したようである。

若い頃の小栗を知る手がかりとして、隅田川における花見の逸話もよく知られている。朝比奈甲斐守昌広（のちに外国奉行）の誘いで花見に同行した小栗は、花や酒や酌をする美人には気にも留めず、舟から見た堤に思考を巡らせ、水利や水田のためには高いほうがよいか、低くしたほうがよいだろうかなどと大いに語り、他の者を呆れさせたという。小栗はもともと風流といった気質は乏しかったようで、唯一の書画の趣味も鑑定家によって価値が決まる宋や明の骨董収集などには興味なく、大家が自分の目の前で書いたものだけを大事にしたといわれている。

明治時代になると製鉄所は横須賀造船所と改名され、日本の新名所となって多くの見学者が横須賀を訪れるようになった。この観光案内図を見ると中央の二号ドックが完成しているので、明治十七年以降に描かれたものであることが分かる。

歴史の表舞台に登場

安政二年（1855）、新潟奉行であった父忠高が病死し、二十九歳で小栗家の家督を継ぎ、十二代目として小栗又一忠順を名乗った。安政四年に御使番、安政六年に本丸御目付となり、大老・井伊掃部頭（かもんのかみ）直弼によって遣米使節の目付に抜擢され、従五位下・豊後守を任官して歴史の表舞台に登場する。文久二年には豊後守改め上野介を任官した。万延元年九月末の帰国後、外国奉行、勘定奉行、南町奉行、軍艦奉行、陸軍奉行などを歴任し、幕府瓦解直前の慶応四年一月に罷免されるまでの活躍は、咸臨丸シリーズで掲載したとおりである。小栗は勘定奉行として幕府の逼迫した財政を支えて、外国方幕臣・福地源一郎によれば「幕末の数年間、小栗なくして幕府はあれほど長くは持たなかっただろう」と述懐するほどの働きをし、その財政難の中で冗費を切り詰め、大造船所建設を成し遂げたのである。

ヴェルニー公園の小栗上野介忠順の胸像。臨海公園の時代からたびたびその設置場所は移動されたが、現在はゆかりの横須賀製鉄所ドライドックを見守る場所にヴェルニー像とともに置かれている。

三河武士・小栗家の出自

小栗家は遠く清和源氏の流れを汲み、三河国岩津城主・松平信吉を初代とする。徳川家の祖といわれる松平太郎左衛門親氏は、小栗家と共通する祖先にあたっている。松平廣忠とその息子徳川家康に仕えた三代目吉忠のとき、母系の小栗姓に変えている。武勇で名を馳せた四代目小栗忠政は十三歳から家康の小姓を勤め、元亀元年（1570）浅井長政、朝倉景健連合軍と織田信長、徳川家康連合軍が戦った姉川の戦いに初陣として出陣した。十六歳の忠政は常に家康の周辺警護にあたり、浅井の放った敵兵が家康に忍び迫った際、危険を察知した忠政はとっさに家康の槍を掴んで敵と渡り合った。騒ぎで異変に気が付いた家来たちが駆けつけて家康は難を逃れ、忠政はその功績から家康の槍を褒美に賜った。元亀三年（1572）当時最強と謳われた武田信玄軍との三方ヶ原の戦闘では、負け戦となって敗走し浜松城に逃げ帰る家康の後ろを守り、忠政は必死に武田軍を追い払った。余談だが、今年のＮＨＫ大河「江」の実父が浅井長政で、天正元年（1573）江が生まれてまもなく、長政は織田軍に小谷城を包囲され自害している。

天正三年（1575）長篠の戦で奮戦する姿は屏風絵にも残り、その後も勇猛な忠政は家康の戦でたびたび一番槍を入れ、家康から「小栗がまた一番か。今後“又一”と名乗れ。」と又市を又一と改めさせ、以来この又一は小栗家の由緒ある名となった。

慶長十九年（1614）大阪冬の陣で、船場の橋が焼け落とされたかどうかを確認する為、忠政は敵陣近くまで馬で乗りつけて検分した。敵将上条又八は単騎で乗り込んできたその恐れ知らずの勇敢さに感銘し、敬意を表して「かかる勇士を撃ちとってはならぬ。」と弓や鉄砲で忠政を狙い撃つのを止めさせた。

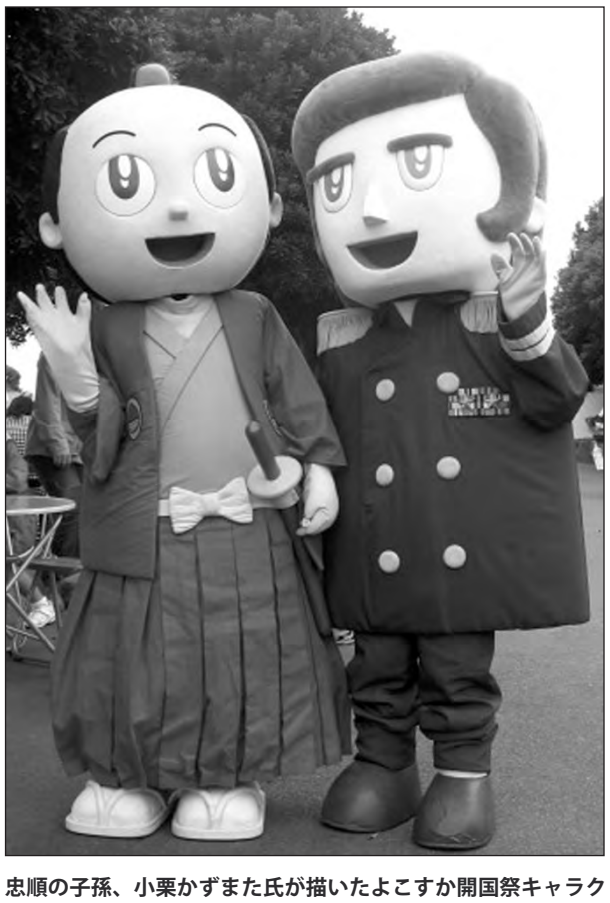
忠政の長男、五代目となる政信は二代将軍秀忠の武将として常に戦をともにし、江戸幕府では二千五百石の旗本として仕えた。政信は大久保彦左衛門と屋敷も近く、仲がよかったという。十二代目忠順のとき、遣米使節の手柄として二百石加増され、二千七百石となっている。

四代忠政はその功績から他の息子の信由や信友ら六家の分家を許され、武芸に優れた次男・仁右衛門信由は、実戦的な総合武術小栗流を編み出し、小栗流はのちに土佐藩にまで伝わって、坂本龍馬も入門して学んでいる。高崎などには分家の子孫が数多く存在しているようである。

本家の旗本小栗家は忠順が非業の死を遂げたあと、懐妊していた妻道子は会津に逃れて国子を出産した。道子と国子はのちに東京で三井の大番頭三野村利左衛門や大隈重信らの庇護を受け、国子は成人して矢野貞雄を小栗家十四代目として夫に迎えた。貞雄は作家でジャーナリストの矢野龍渓文雄（大阪毎日新聞副社長など歴任）の実弟である。貞雄を迎えるまでの間、小栗家十三代目は忠順の養嗣子・又一忠道の弟・忠祥が継いでいた。以後、又一（十五代）、忠人（十六代）、又一郎（十七代）と続き現在に至っている。忠順のたった一人の子孫で、玄孫に当たる又一郎氏は、小栗かずまたというペンネームで少年および児童向けの漫画家として活躍し、よこすか開国祭のゆるキャラ「ペリリン」「オグリン」を描いた作者としても知られている。横須賀市の開国祭キャンペーン事業に忠順の子孫が関わったことは、両者の深い縁を感じさせるものがある。

（参考文献：「幕末開明の人―小栗上野介」市川光一、村上泰賢共著。「小栗忠順のすべて」村上泰賢編著。「最後の幕臣―小栗上野介」星亮一。「幕末政治家」福地源一郎。「徳川将軍十五代のカルテ」篠田達明など。）

江戸幕府二代将軍徳川秀忠の錦絵。小栗家五代目の政信は秀忠の武将として、戦では常に秀忠とともに出陣した。ちなみに秀忠の妻は今年のＮＨＫ大河の主役の江で、織田・徳川連合軍に滅ぼされた浅井長政と伝説的美女“お市の方”の三女である。江は竹千代（後の三代将軍家光）と国松（忠長）を生み、秀忠と江は凡庸な家光に比べその聡明さで周囲の期待を集めた忠長を寵愛したと伝わる。



忠順の子孫、小栗かずまた氏が描いたよこすか開国祭キャラクター「ペリリン」と「オグリン」。